

可解な量子力学系があったとき, ground state から $W'(x)$ を構成し, 超対称パートナーとして可解系を見つけること, さらに一般化して, パラメータ \mathcal{E} として $H = A^\dagger A + \mathcal{E}$ に対する超対称パートナーを見つけ, 可解な量子力学系のファミリーを作る方法を見た.

前者の構成法に対する具体例を見る.

Example 1

ポテンシャルを

$$V_{(1)}(x) = \begin{cases} -\frac{\pi^2 \hbar^2}{2mL^2}, & (0 < x < L) \\ \infty, & (x > 0, L < x) \end{cases} \quad (1)$$

で与える. Ground state は $\psi_{0,+}(x) = \sqrt{2/L} \sin(\pi x/L)$ であり, 第 n 励起状態は $\psi_{n,+}(x) = \sqrt{2/L} \sin((n+1)\pi x/L)$ でエネルギーは $E_n = n(n+2)\pi^2 \hbar^2 / (2mL^2)$ である.

今, 基底状態を用いて, $W'_{(1)}(x) = -\hbar \psi'_0(x) / \psi_0(x) = -\pi \hbar / L \cot(\pi x/L)$ と定めると, ポテンシャルは

$$V_{(1)}(x) = -\frac{\pi^2 \hbar^2}{2mL^2} \quad (2)$$

$$V_{(2)}(x) = \frac{\pi^2 \hbar^2}{2mL^2} \left(\frac{2}{\sin^2(\pi x/L)} - 1 \right) \quad (3)$$

となり, これは Witten model のところで見えたものと同じである.

これら二つのポテンシャルからなる系のエネルギーは超対称性から同じスペクトラムになり, 二つ目の系の固有状態は既知である $\psi_{n,(1)}(x)$ を用いて, $\psi_{n,(2)}(x) = A\psi_{n,(1)}(x)$ で与えられる. ここで, A は intertwiner で

$$A = \frac{-i\hbar}{\sqrt{2m}} \left(\frac{d}{dx} + \frac{1}{\hbar} W'(x) \right) = \frac{-i\hbar}{\sqrt{2m}} \left(\frac{d}{dx} - \frac{\pi}{L} \cot\left(\frac{\pi x}{L}\right) \right) \quad (4)$$

である. 具体的に幾つか計算し, $H_{(2)}$ の固有状態になっていて, 固有値は $H_{(1)}$ に等しいことが確認できる.

0.1 形状不変性

SUSY では, 片方の系が exactly solvable であるとき, 各エネルギー固有値, 固有状態にパートナーを対応付けて exactly solvable にすることが出来た. つまり, この手法は片方の系が exactly solvable でないと使えないが, 形状不変性 (Shape invariance: SI) と組み合わせることで, zero energy state さえわかっていれば二つの系が exactly solvable であることが言える.

Definition 2 (Shape invariance)

系のパラメータ a を明示し, 超対称パートナー Hamiltonian $H_\pm(a)$ があったとする. これらに形状不変性があるとは

$$H_-(a) = H_+(a_1) + \varepsilon(a_1), \quad a_1 = f(a) \quad (5)$$

なる関係があることをいう.

言葉でいうと, パラメータを f で変換して, 定数 $\varepsilon(a_1)$ の違いでパートナーに一致するときに, 形状不変性があるという.

Example 3

定義域 $-\pi/2 < x < \pi/2$ で superpotential を $W(x; a) = \hbar a \log(\cos x)$ で与える. このとき, ポテンシャルは

$$V_\pm(x; a) = \frac{\hbar^2}{2m} \left(\frac{a(a \mp 1)}{\cos^2 x} - a^2 \right) \quad (6)$$

で, これは, $a \mapsto a+1$ とすると $V_-(x; a) = V_+(x; a+1) + (a+1)^2 - a^2$ となる. つまり, $a_1 = a+1$, $\varepsilon(a_1) = a_1^2 - (a_1-1)^2$ の形状不変性がある.

この状況は, up to 定数シフトで $H_-(a)$ と $H_+(a+1)$ が同じ Hamiltonian で, エネルギー固有状態は $\psi_{n,+}(x; a) = \psi_{n,+}(x; a+1)$, ($n \geq 0$) であり, エネルギー固有値は $E_{n+1,-}(a) = E_{n,+}(a+1) + \varepsilon(a+1)$ である. $H_+(a+1)$ の groundstate ($n=0$) と $H_-(a)$ の groundstate ($n=1$) が対応するので, label がずれている.

これで, $H_\pm(a)$ の全てのエネルギー固有状態及びエネルギー固有値がわかることになる. まず, 形状不変性から $\psi_{1,-}(x; a) = \psi_{0,+}(x; a+1) \propto \cos^{a+1}(x)$ となり, SUSY の intertwiner を用いて, $\psi_{1,+}(x; a) = A^\dagger(a) \psi_{1,-}(x; a)$ となる. 更に形状不変性を使うと $\psi_{2,-}(x; a) = \psi_{1,+}(x; a+1) = A^\dagger(a+1) \cos^{a+1}(x)$ と順次求めることができる.

energy に関しても, SUSY より $E_{n,+}(a) = E_{n,-}$ があるので, $E_{1,-}(a) = E_{0,+}(a+1) + \hbar^2((a+1)^2 - a^2)/(2m) = \hbar^2((a+1)^2 - a^2)/(2m) = E_{1,+}(a)$ で, $E_{2,+}(a) = E_{1,+}(a+1) + \hbar^2((a+1)^2 - a^2)/(2m) = \hbar^2((a+2)^2 - a^2)/(2m) = E_{2,+}(a)$ などと求められる. \square

同様の手法で一般論を作れる.

Theorem 4

$H_+(a)$ のエネルギー固有値とエネルギー固有状態は $\psi_{0,+}(x; a)$ から次のようにして作れる.

$$\psi_{n,+}(x; a) = \prod_{k=1}^n \frac{1}{\sqrt{E_k(a_{n-k})}} A^\dagger(a) A^\dagger(a_1) \cdots A^\dagger(a_{n-1}) \psi_{0,+}(x; a) \quad (7)$$

$$E_n(a) = \sum_{k=1}^n \varepsilon(a_k) \quad (8)$$

ここで, $a_n := f(a_{n-1}, a_0 := a)$ で $n \geq 0$ である.

Example 5 (調和振動子)

$$H_\pm(\omega) = -\frac{\hbar^2}{2m} \frac{d^2}{dx^2} + \frac{1}{2} m \omega^2 x^2 \mp \frac{\hbar \omega}{2} \quad (9)$$

で, ゼロエネルギー解は $\psi_{0,+}(x; \omega) = (m\omega/\pi\hbar)^{1/4} e^{-m\omega x^2/(2\hbar)}$ である. 形状不変性は $H_-(\omega) = H_+(\omega) + \hbar\omega$ で, $\varepsilon(\omega) = \hbar\omega$ である.

これより, エネルギー固有値は $E_n(\omega) = \sum_{k=1}^n \varepsilon(\omega) = n\hbar\omega$ で, 固有状態は Hermite 多項式

$$H_n(q) = (-1)^n e^{q^2/2} \left(\frac{d}{dq} - q \right)^n e^{-q^2/2} \quad (10)$$

を使って,

$$\psi_{n,+}(x; \omega) = \prod_{k=1}^n \frac{1}{\sqrt{E_k}} (A^\dagger)^n \psi_{0,+}(x; \omega) \quad (11)$$

$$= \frac{1}{\sqrt{(\hbar\omega)^n}} \left(\frac{-i\hbar}{\sqrt{2m}} \left(\frac{d}{dx} - \frac{m\omega}{\hbar} x \right) \right)^n \left(\frac{m\omega}{\pi\hbar} \right)^{1/4} e^{-m\omega x^2/2\hbar} \quad (12)$$

$$= \frac{i^n}{2^n \sqrt{n!}} \left(\frac{m\omega}{\pi\hbar} \right)^{1/4} e^{-m\omega x^2/2\hbar} H_n \left(\sqrt{\frac{m\omega}{\hbar}} x \right) \quad (13)$$

となる. □

Example 6

superpotential を $W(x; a, b) = -\hbar \log(\cos^a x + \sin^b x)$ で与える. ポテンシャルは

$$V_\pm(x; a, b) = \frac{\hbar^2}{2m} \left(\frac{a(a \mp 1)}{\cos^2 x} + \frac{b(b \mp 1)}{\sin^2 x} - (a+b)^2 \right) \quad (14)$$

であり, 形状不変性は $a_1 = a+1, b_1 = b+1$ で $\varepsilon(a_1, b_1) = 2\hbar^2(a_1 + b_1 - 1)/m$ となる. □

超対称性と形状不変性を用いた可解な量子力学系については, [arXiv:hep-th/9405029](https://arxiv.org/abs/hep-th/9405029) が有名である.